奈文研ニュース
No.76 Mar. 2020
NABUNKEN NEWS
NARA NATIONAL RESEARCH INSTITUTE for CULTURAL PROPERTIES
独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2-9-1
https://www.nabunken.go.jp

ベトナム・カイベー集落調査に対するティエンザン省知事表彰

文化庁文化財部とベトナム文化情報省（現文化スポーツ観光省）との間に結ばれた技術協定をもとに、文化庁からの要請を受けて、奈良文化財研究所や昭和女子大学等が、ベトナムの集落調査や保存計画策定の協力をおこなってきました。調査地はベトナム北部のハタイ省ドゥオンラム村（2003～2006）や中部のトゥアンティエン・フエ省フォックティック村（2009～2010）、南部のドンナイ省フーホイ村（2010～2011）、同じく南部のティエンザン省カイベー県ドンホアヒエップ村（2011～2013）の４村で、各調査では伝統的民家と寺院、歴史的な集落景観の特徴に関する調査研究、正確な地図や建物の台帳等の基礎的データの作成をおこない、観光開発やまちづくりにつながる提案をまとめ、それぞれ日本語版と英語版の報告書を刊行しました。この４村はその後、ベトナムの国家文化財に指定され、観光地としても賑わいをみせています。

ドンホアヒエップ村のあるカイベー県はホーチミン市の南西、メコンデルタに位置し、メコン川やその支流を利用した水上マーケットで有名な街です。ドンホアヒエップ村では、文化遺産部建造物研究室、景観研究室、都城発掘調査部遺構研究室、企画調整部写真室の職員が参加し、伝統的な民家建築や寺院建築の調査、集落構造や景観に関する調査に加え、大工道具の調査もあわせておこないました。ドンホアヒエップ村は、運河が張り巡らされたなかに大規模な民家が点在し、19世紀後半から20世紀初頭のベトナムの伝統的民家に加えて、西洋スタイルの装飾や平面をもつ20世紀前半頃の民家も存在し、ふたつの民家形式が混在した特徴的な集落景観を構成しています。

このドンホアヒエップ村の集落調査および保存計画策定のための協力、その後の日越文化交流への貢献が評価され、昨年11月にティエンザン省知事より表彰をいただきました。表彰式は第４回ドンホアヒエップ文化観光祭2019にておこなわれました。奈文研とともに文化庁やJICAベトナム事務所等も表彰を受け、その様子はベトナムのテレビ番組で生放送されました。

ベトナムの伝統的な集落や町並の保存計画の策定、国家文化財への指定、そしてこれらを踏まえた観光事業や街づくりはこれからも続いていきます。今後もベトナムでの調査協力や文化交流を継続し、学術的な調査研究に加え、地元地域の発展につながる協力をおこなっていきたいと思います。

（都城発掘調査部　福嶋 啓人）

ドンホアヒエップ文化観光祭での表彰式

表彰状

発掘調査の概要

藤原宮外周帯の調査（飛鳥藤原第201－３次）

藤原宮の大垣を取り囲む外濠と条坊道路との間には空閑地があり、外周帯と呼んでいます。本調査区は、藤原宮の南面大垣と六条大路との間の外周帯に位置します。既設水路の改修にともなう事前調査で、調査区は、南北約２ｍ、東西約97ｍ、面積195㎡で、形状は北に隣接する里道に沿って緩やかに蛇行します。東一坊坊間路の推定線上にあり、先行東一坊坊間路東西側溝の検出が期待されました。調査期間は、2019年11月18日から12月12日までです。

調査区内は既設水路による削平が著しく、遺構の残存状況は良くありませんでしたが、古代の整地層を調査区の南壁で確認するとともに、古代とみられる遺構を検出することができました。

調査区の東部では、幅0.6～0.7ｍの南北溝を２条確認しました。東一坊坊間路推定位置の近くで、先行東一坊坊間路東西側溝に相当する可能性があります。しかし、いずれも深さが0.2ｍ程度しか残存せず、出土遺物も少ないため、同側溝であると断定することはできませんでした。また、調査区の西部では、幅0.7ｍの素掘りの東西溝を検出しました。年代の特定はできませんでしたが、古代の遺構の可能性があり、これまで空閑地と考えられてきた藤原宮外周帯の土地利用について、新たな知見となります。このほか、調査区西端では古代の整地層を掘り込む溝状遺構から、藤原宮期の軒瓦が出土しました。

本調査は幅２ｍという狭い調査区ではありましたが、様々な知見が得られました。このような調査を積み重ね、藤原宮の実態を少しずつ解明していきたいと思います。　　（都城発掘調査部　大林 潤）

南北溝検出状況（北東から）

藤原京左京八条三坊の調査（飛鳥藤原第202次）

市道（国道165号小山線）の一部付け替え工事にともなって、2019年11月18日から藤原京左京八条三坊東南坪で発掘調査を実施しています（調査面積608㎡）。香久山の南西麓にあたり、法然寺の東に位置するこの場所は、現在、水田風景がひろがっています。中の川の支流である百貫川が北流しているように、旧来は、おそらく東と西の高燥地に挟まれた狭小な谷状の地形だったのでしょう。

さて、水田の耕作土や床土を掘り進めていくと、地表下１ｍほどの深さで、細かな砂層や拳大の礫層が見つかりました。これらの土層は、弥生時代やそれ以前に起こった洪水によって運ばれた自然堆積土と考えられます。その上面で遺構を検出しました。

中世では、縦横に伸びる小溝を多数検出しました。この小溝は、田畑耕作にともなう鋤溝と思われます。また、田畑を区画するような幅広の溝も確認でき、一部ですが、現在の水田畦畔の場所と一致するものがありました。この地での田畑耕作は、少なくとも中世にまではさかのぼるようです。

調査区の南半では、洪水によって生じた起伏を平坦に整備するような、中世の整地土が見つかりました。田畑耕作にくわえ、中世には土地を整備し、利用していたようです。調査区西の法然寺は中世の創建と伝えられており、こうした動向と関連があるのかもしれません。

さらに、斜行大溝や掘立柱建物の柱穴等、藤原京期と思われる遺構が見つかりつつあります。藤原京期には、どのような土地利用があったのか。次号で紹介する予定です。ご期待ください。

（都城発掘調査部　和田 一之輔）

調査風景（南東から）

東大寺東塔院跡の調査

東大寺東塔院は、対をなす西塔とともに当代随一の高さを誇った七重塔と、それを囲む廻廊等からなります。これらの創建は奈良時代に遡りますが、平安時代末、平重衡の南都焼き討ちに遭い焼亡しました。鎌倉時代に入り再建されたものの、南北朝時代に落雷により再び焼失し、それ以降再建されることはありませんでした。

奈良文化財研究所は、平成27年度から東大寺、奈良県立橿原考古学研究所とともに史跡東大寺旧境内発掘調査団を結成し、境内整備事業の一環として東塔院跡の発掘調査を実施しています。事業の５年目にあたる今年度の調査は、塔を取り囲む東面・北面・西面の廻廊および門の実態解明と、遺存状況の確認を目的として実施しました。調査期間は2019年７月22日から12月20日、調査面積は827.25㎡です。

今年度の調査では、奈良時代創建当初の門の規模と柱配置を初めて確認することができました。特に東門の調査において、奈良時代創建期の礎石建物と鎌倉時代再建期の礎石建物を重複して検出し、それぞれの構造や規模と造り替えの様子があきらかになりました。

奈良時代創建期の東門は桁行３間、梁行２間で建物規模は桁行約12.7m（中央間15尺、両脇間14尺）、梁行約7.1m（12尺等間）と推定できます。この東門にとりつく東面廻廊では廻廊棟通りの礎石と敷塼列を検出し、奈良時代の東塔院廻廊は中央を壁で仕切られた２列の通路をもつ複廊であったとする昨年度の調査所見を追認できました。

また、鎌倉時代の東門基壇上には礎石１石と門の出入りに関わる凝灰岩切石や東雨落溝を跨ぐ通路となる敷石遺構等が良好な状態で残っていました。この鎌倉時代の再建東門は、奈良時代創建期の門と同様の桁行３間、梁行２間の礎石建物ですが、創建門基壇の内庭側を削り、建物規模を桁行約11.7m（中央間15尺・両脇間12尺）、梁行約5.4m（９尺等間）へと規模を縮小していることがわかりました。北門、西門の調査でも同様の所見を得ており、鎌倉時代に再建された東塔院の東・北・西の三門は同規模であったことを確認しています。

このほか、東面廻廊と北面廻廊がとりつく東塔院東北隅の調査では、元々の自然地形である東から西に下る尾根の斜面を削り平坦面を確保するなど、自然地形を大きく改変して廻廊を築いていたことがあきらかになりました。

今回の調査を通じて、奈良時代創建期の東塔を囲む廻廊と門の実態があきらかになるとともに、鎌倉時代の再建に際して、門や廻廊の基壇の幅を狭めて規模を縮小し、複廊を単廊へと造り替えるなど大きな改造をおこなっていたことがあきらかになりました。

なお、11月10日には現地説明会を開催し、850名の方にお越しいただきました。また、調査中も修学旅行生や国内外からの観光客などたくさんの方々が現場の前で立ち止まり、調査の様子を見学されるなど、私たちの調査への関心の高さを感じました。

５年間にわたる発掘調査により、東大寺東塔院のすがたが徐々にあきらかになりつつあります。これからはさらに出土遺物の詳細な分析も含めた総合的な検討をおこなう予定です。今後の成果にご期待ください。　　（都城発掘調査部　小田 裕樹）

東門・東面廻廊調査区の全景（南西から）

鎌倉時代東門基壇上面（北から）

奈文研ギャラリー（68）

文字瓦を上から見た写真。側縁（右）が剣先形になっている。川原寺所用瓦窯である荒坂瓦窯の特徴。

飛鳥寺北方出土文字瓦（原寸大）

狭くて細長い調査区から飛鳥寺の瓦が大量に　飛鳥寺北方の調査（飛鳥藤原第 188-19 次、192-1・2 次）

2017 年 3 月から 11 月にかけて、飛鳥寺講堂の約 40m北で発掘調査を実施しました。調査は県道上のガス管の移設や電線共同溝設置にともなうもので、幅 0.5 ～ 2 m、全長 240 mにもおよぶ狭くて長い調査区でしたが、そこからコンテナ 417 箱もの大量の瓦が出土しました。瓦の時期は、古代のものを中心に近現代までと幅広く、種類も軒瓦、丸・平瓦をはじめ、鴟尾、磚（古代のレンガ）、文字瓦などさまざまです。

本調査区から出土した瓦は、軒丸瓦は 6 世紀末から 7 世紀初頭までの飛鳥寺創建瓦と 7 世紀後半の瓦が大半を占め、1956・1957 年の飛鳥寺中心伽藍の発掘調査で出土した瓦の様相とも合致します。ただし、川原寺と同じ軒丸瓦や軒平瓦、丸・平瓦が一定量出土したことは注目できます。飛鳥寺には川原寺の瓦窯からも瓦が運び込まれていました。写真の文字瓦は原寸大で、側縁が剣先形を呈し、表面の叩き目や布目をすり消した丁寧なつくりです。これらは川原寺創建瓦を生産した奈良県五條市荒坂瓦窯の特徴であり、7 世紀後半に位置付けることができます。書かれた文字は人名とみられ、瓦生産に関わった工人の氏族名の可能性も考えられます。

これらの瓦は飛鳥寺のどの建物に使われたものなのでしょうか。調査区に近接する講堂がその候補のひとつになりますが、講堂にどのような瓦が用いられていたのか現状ではまだわかっていません。今後、丸・平瓦を含めた総合的な瓦の調査を進めながら、周辺の調査成果にまちたいと思います。

（都城発掘調査部　石田 由紀子）

カザフスタン共和国国立博物館での考古学研修

奈文研は文化庁の委託により、2019年４月から、カザフスタン共和国国立博物館を相手国拠点とし、考古遺物の調査・記録・保存に関する技術移転を目的とした拠点交流事業を開始しました。11月19日から22日まで国立博物館に研究者３名を派遣し、①レプリカ法による土器の圧痕分析と、②土器に残存する脂質の分析の研修をおこないました。

①は土器の表面に残る植物等の圧痕にシリコンを注入してレプリカを採取し、それを走査型電子顕微鏡で観察して、植物等の種類を同定する方法です。明治大学の佐々木由香さんがこの方法について説明し、その後、カザフスタンの初期鉄器時代の土器を用いて実習をおこないました。受講者は専用キットを使って圧痕のレプリカを採取しました。②は土器の胎土に残された脂質を抽出・分析することで、土器で調理された食物をあきらかにする方法です。奈文研国際遺跡研究室室長の庄田が、はじめにこの方法の概要を説明し、東アジア各地の先史時代の土器の分析から得られた成果を報告しました。次に、カザフスタンの青銅器時代・初期鉄器時代の土器片を用いて、試料を採取する実習をおこないました。

４日間の研修には、国立博物館の研究員の他、国立ユーラシア大学、ナザルバエフ大学の教授・学生など27名が参加しました。参加者からは、本研修を通して新しい土器の調査方法について知ることができた、他の研修と違って実習も含まれているのがよかった等の感想が寄せられました。今後も考古学研修を通して、カザフスタンの文化遺産の調査・保存を担う専門家との技術交流・研究協力を続けていきます。

（企画調整部　影山 悦子）

レプリカ法による土器の圧痕分析の実習

奈文研との学術交流に参加して

私たちは中国社会科学院考古研究所と奈文研との共同研究にもとづき、2019年11月１日から12月１日まで、奈文研の方々と交流することができました。

期間の前半は、奈文研が東大寺、奈良県立橿原考古学研究所と共同で実施していた東大寺東塔院の発掘調査に参加しました。実際に、遺構を発掘し、土層図の作成などをおこないました。そこでは、日本と中国の発掘方法の違いを感じるとともに、自分たちの発掘方法について見つめ直す機会を得ました。日本古代の代表的な寺院である東大寺の調査に参加できたことは得難い機会でした。

後半は、奈文研のいくつかの部署を見学しました。特に、木器にのこる年輪を手掛かりに複数の遺物を接合するという研究は、中国でも珍しく非常に興味をもって、担当の研究員の方と議論をしました。木器の保存方法や研究方法については中国でも非常に関心が高まっています。今後も、こうした方面で日本との交流を深めたいと感じた次第です。

11月26日には、奈文研にて講演をおこないました。周は「旧石器時代の火を用いた技術　寧夏省水洞溝遺跡を例として」、唐は「江蘇省蘇州木瀆古城遺跡の発掘調査と研究（東周～漢代）」と題して、それぞれ現在の研究や発掘調査の紹介をし、奈文研の多くの研究員からさまざまな質問、意見をいただくことができました。

１カ月という短い間でしたが、多くの研究者と知り合うことができたことは、今後の我々自身の財産ともなり、同時に両研究所間の友好関係を促進するうえでも大きな力となるでしょう。このような有意義な交流が継続することを希望します。

（中国社会科学院考古研究所　周 振宇・唐 錦琼）

土層図の作成

退職にあたって思い出すことなど

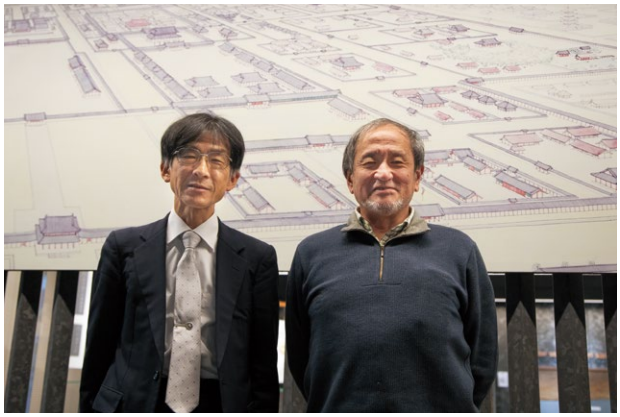
奈文研で過ごした31年間、長かったような短かったような不思議な感覚を覚えます。幸か不幸か、31年間一度の異動もなく、ずっと平城宮跡の発掘調査を担当する部署で過ごしてきました。正直言ってまだ振り返る気分でもないのですが、思い出すのは発掘現場のことばかり。

平城宮では、総担当を務めた兵部省の終局と東区朝堂院南門をはじめ、東区朝堂院第三堂、神祇官西院・東院、右馬寮、東院南門、同園池南岸建物と二条条間路北側溝、同「楼閣宮殿」、同中枢西辺、東方官衙、佐紀池南岸西大溝、西楼、称徳天皇の大嘗宮、東北官衙等。平城京内では、長屋王家木簡溝の北端、二条大路北濠状遺構、大学寮推定地、田村第、興福寺西室、同一乗院（奈良地裁）、同大乗院西小池、法華寺阿弥陀浄土院、春日東塔、西大寺食堂院など。この他小さい現場も枚挙にいとまがありません。幸運なことに、まとまった木簡の出土にも何度か立ち会うことができました。

遺構や遺物の語ることに耳を傾ける時間のなんと幸せだったことか。少なくとも研究業務面に関する限り、さしたるストレスを感じることもなく、四半世紀以上にわたって業務に携わって来られたのは、奈文研のチームワークのなせるわざ。ただただ感謝の言葉しかありません。

私たちの仕事は、まさに継続は力なりを地で行くようなものです。その意味でも次世代に無事バトンタッチできることを心から喜びたいと思います。やり残した仕事も実は多々あって、特に、掘った木簡の整理を完結できないまま退職するのは心苦しい限りです。長い間本当にありがとうございました。

（副所長・都城発掘調査部副部長　渡辺 晃宏）



渡辺副所長（左）と玉田部長（右）

中国考古学事始

1991年に、中国社会科学院考古研究所との共同研究が始まりました。私はその第１回目の派遣として、先輩の深澤芳樹さんと中国を訪れました。当時は海外に仕事で行くことなどほとんどなく、初めての海外出張でした。期待と不安を胸に伊丹空港を飛び立ち、上海上空を経て北京空港に降り立ちました。２ヶ月間にわたり、多くの遺跡を訪れましたが、見るもの聞くものが全て新鮮です。今では考えられないことですが、当時は外国人が入れない「未開放区」がありました。河北省の磁州窯もそのひとつで、広大で残りの良い遺跡を目の当たりにするとともに、解放後初めて訪れた外国人として、地元の人に大歓待を受けました。

1994年には漢魏洛陽城永寧寺、1997年は漢長安城桂宮の共同発掘に、現富山大学の次山淳さんとともに携わりました。この共同発掘にはその後多くの所員が参加し、唐長安城太液池や、漢魏洛陽城宮殿区の調査へと続いていきます。中国の研究者とともに日を過ごす中で、深い友情が育まれたと思います。

その後も訪中の機会があり、多くの遺跡を見ることができ、その規模と内容に圧倒されたものでした。日本の遺跡に慣れた身には、世界観が変わった、と言っても過言ではありません。その経験は、その後の調査研究において、大きな財産となりました。

現在、奈文研は多くの国と研究交流しています。考古研究所との交流が、初めての継続的な国際交流でした。その草創期に直接携わらせてもらうことができ、幸甚でした。今般、定年にあたり、そのことに感謝するとともに、国際交流の更なる発展と、奈文研の研究成果を多くの国に発信していけることを願っています。

（都城発掘調査部長　玉田 芳英）

磁州窯での踏査の様子　1991年（筆者撮影）

飛鳥資料館　春期特別展「飛鳥の石造文化と石工」

2020年度の最初の展覧会は、古代飛鳥の石の文化に注目します。亀石や酒船石、亀形石槽は飛鳥を象徴する文化財の一つと言ってよいでしょう。このような古代飛鳥を語るうえで欠かせない石造物をはじめ、古墳の石室、宮殿の敷石、寺院の礎石、工房の砥石等、飛鳥の都ではさまざまな使い方で石を利用していました。須弥山石や石人像、苑池のように、石と水を組み合わせて用いる技術も花開きました。

この展覧会では、亀形石槽や猿石等著名な石造物の魅力とともに、現代に生きる石工の道具等も紹介します。庭園にある石造物の石製複製とともにお楽しみください。

（飛鳥資料館　石橋 茂登）

復元された須弥山石

会　　期：2020年４月24日（金）～６月14日（日）　月曜休館（祝日の場合は翌平日）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/asuka/　お問合せ：☎ 0744-54-3561

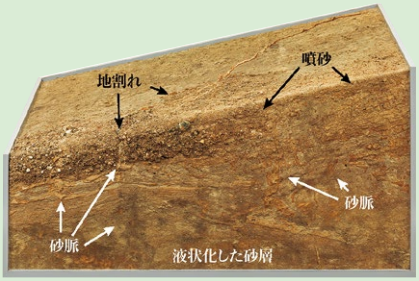
平城宮跡資料館「平城宮跡周辺でみつかった巨大地震の痕跡」

平城宮跡資料館の考古科学コーナーでは、奈良文化財研究所庁舎建て替えにともないおこなわれた平城第530次調査で遺跡から切り取った巨大地震の痕跡を展示しています。

発掘調査では、奈良の地が巨大地震によって何度も被災していたことを示す、地割れや液状化、それにともなう噴砂や砂脈の痕跡が多く発見されています。よく奈良は、藤原京や平城京があったことから災害の少ない安全な土地であると言われますが、展示している地震の痕跡は震度５弱以上の巨大地震によって引き起こされたと推定され、奈良の地もけっして安全とは言い難いように思えます。このような被災履歴を理解しておくことは、防災・減災に直接的に結びつくため、私たちの将来の生活を考える上でも大変重要な意味があります。

今後も奈文研の最新の研究成果を展示していきたいと思います。

（埋蔵文化財センター　村田 泰輔／企画調整部　藤田 友香里）



切り取った地層の断面に残る巨大地震の痕跡

開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）　月曜休館（祝日の場合は翌平日）
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/　お問合せ：☎ 0742-30-6753（連携推進課）

■　お知らせ

第18回平城宮跡クリーン大会

４月４日（土）朱雀門ひろば
９：30集合（申込不要）　※雨天の場合は中止

■　記　録

文化財担当者研修（専門研修）

○文化財デジタルアーカイブ課程
　１月20日～１月24日　18名
○史跡保存活用計画策定課程
　２月３日～２月７日　16名
○文化財防災・減災課程
　２月12日～２月14日　12名
○保存科学Ⅴ（材質・構造調査）課程
　２月18日～２月21日　10名

平城宮跡資料館　新春ミニ展示

１月４日（土）～１月26日（日）　4,456名
「平城京の子」

飛鳥資料館　冬期企画展

１月24日（金）～２月26日（水）　1,331名
「飛鳥の考古学2019」

平城宮跡資料館　冬期企画展

２月１日（土）～３月29日（日）　3,515名
「発掘された平城2019」　（2.26現在）

※新型コロナウイルス感染防止のため２月27日（木）から休館

■　最近の本

○『木簡　古代からの便り』
岩波書店　2020年２月

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　https://www.nabunken.go.jp
E メール　koho_nabunken@nich.go.jp
発行年月　2020年3月